

通巻850号を迎えてー第7代編集委員エッセイ

Modern Media



## モダンメディア通巻850号を迎えて

杏林大学大学院 医学研究科長  
杏林大学医学部 臨床検査医学教室 教授おお にし ひろ あき  
大 西 宏 明  
HIROAKI OHNISHI

モダンメディアは創刊から70年以上の歴史を持つ医学・公衆衛生学の学術情報誌です。感染症、臨床検査に関する話題を中心に、現在は冊子体とWEB媒体の両者により主に医療関係の皆様へ情報提供を続けております。私は、編集委員を拝命して今年で6年目になりましたが、ちょうど新型コロナウイルス感染症のパンデミックと重なっており、感染症や臨床検査に関する国民の皆さまの関心が急速に広まった時期でもありました。その意味で、本誌の果たす役割は以前にも増して高まってきたものと感じています。

私は本誌のさまざまなコーナーの中で、主に臨床検査関係の欄を担当しております。その中で、「臨床検査アップデート」シリーズは感染症に限らずさまざまな領域で、主に新規に保険収載された検体検査の項目を取り上げていくコーナーで、2004年以来20年以上続いている人気シリーズです。このコーナーは、単に新規の検査項目を紹介するだけでなく、その検査を診断に用いる疾患の概要も含めて、その領域のご専門の先生にわかりやすくご執筆いただく形となっています。そのため、読者の皆さまにとっては、新規検査の意義や利用法だけでなく、疾患の病態や診断法、さらにその治療法に至るまで、最新の知見についての情報が得られる場となっております。

私も、毎回の原稿の校閲をさせていただく中で、自分がよく知らないさまざまな領域の疾患について勉強させていただいております。新規の検査が保険収載されるということは、その疾患が社会的に問題となっている、あるいは診断に結びつく検

査が初めて開発されたなど、注目度が高い疾患が多いことから、読者の皆さまへの情報提供として検査の紹介を超えた意義をもつものと感じています。もちろん、すべての新規保険収載検査を取り上げるわけではなく、なるべく読者の皆様の関心が高いと思われるものを掲載するように心がけております。もしも最近新たに保険収載になったがまだ掲載されていない検査で、ぜひ取り上げてほしいという検査法がございましたら、編集部まで遠慮なくご要望ください。また、まだ保険収載されていない検査でも、ガイドラインに収載されるなど重要性が高いと思われる検査についても、このコーナーで取り上げることが可能ですので、お声がけください。

一方、本誌で人気の高いシリーズとして、新春号に掲載される「新春放談」や特別号に掲載される「座談会」があります。こちらは、創刊から2年後の1957年に開始された長い歴史のあるコーナーで、その時々の医療関係の話題をテーマに、その分野の専門家の先生方をお招きし、編集委員が聞き手となっていく座談会の様子を、ほぼそのまま誌上で再現するものです。バックナンバーで過去の座談会のテーマを見ると、その時代に注目された医療・公衆衛生関係の話題が浮かび上がり、大変興味深く感じられます。例えば、1970年の新春放談では河合忠先生が聞き手となられて、「臨床検査の将来を語るーコンピューターを中心として」というテーマが取り上げられており、現在の臨床検査を取り巻く状況を予見するような内容となっています。これは、今年の新春放談で堤先生と私



が聞き手となった「検査・診断領域における AI の現状と未来」につながるような内容で、改めて本誌の長い歴史に思いをいたし、感慨深いものがありました。座談会のテーマは基本的に医療関係となっており、特に最近のコンプライアンス重視の流れの中ではお堅い内容が多くなるのは仕方ないことなのですが、1986 年には「酒」（聞き手：山口英世先生）、1995 年には「さけと酒」（聞き手：斎藤日向先生）といったライトな内容の座談会も行われており、たまにはそのようなテーマを取り上げるのも個人的には良いのではないかと感じています。ただ、専門家にお集まりいただくのがな

かなか大変かもしれませんが・・・。

他にも、「新版 全国衛生研究所見聞記」、「シネマをいろどる病と医療」など、他ではなかなか見ることのできないユニークなコーナーもあり、長年にわたり誌面構成をブラッシュアップしてこられた編集委員と編集部のごこれまでのご苦勞とご尽力に深く敬意を表する次第です。今後も、この歴史あるモダンメディア誌をさらに魅力あるものにするよう、編集委員一同努めてまいりたいと思いますので、読者の皆さまには忌憚のないご意見と、末永いご愛顧を賜りますよう、今後ともよろしくお願い申し上げます。

